



## 読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。  
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。  
(編集部より)

### 女性医師の窓

## 家族との時間

石川県立中央病院 研修医 越田 晶子

「夜に爪を切ると親の死に目に会えない」とはよく聞く言い伝えです。小刀で爪を切っていたような時代、囲炉裏の灯りしかない夜の農村では爪を切る際に誤って手を切ってしまうことがあり、そこから化膿して手を失いときには命を落としてしまうこともあったためにこの言い伝えが生まれたそうです。電気も爪切りもある現代ではただの迷信にすぎませんが、私も小さい頃は母にこの言い伝えを言われて親の死に目というものが何かよく分からないままとりあえず朝に爪を切るようにしていたものです。

そんな私も昨年春から医師として働き出し、受け持っていた方の最期に立ち会わせていただく経験もしました。病室に泊まり込んで最期まで看取られたご家族、駆けつけたものの最期には立ち会えなかったご家族、急な事故で心の準備が何もないまま現実を突きつけられたご家族など、いろいろな家族の最後の形を見る中で、自分は将来親の死に目に会えるのか、不安になることがあります。私には姉と兄がいますがどちらも遠方に住んでいるため、私が両親の将来の面倒もみるつもりで就職の時に石川に帰ってきました。しかし、例えば自分が主治医である患者が急変したときや大規模震災時に医師として働くときなどは真っ先に駆けつけられませんし、そうでなくても駆けつけても単純に間に合わないということもあります。親のためを想って石川に帰ってきたのに、実際は近くに住んでいても大変なときにそばにいられないこともあるということを感じました。

では、そんな私でも両親に何をしてあげられるのか。それは両親との今を大切にすることだと思いました。例えば、不慮の事故で命を落としてしまう方は石川県内だけで年間50人以上います。人はいつ死んでしまうのか分からないのですから、かなり偏った考え方ではありますが、命が終わる日も記念日も何でもない日でも本当は同じくらい大切な日なのだと思います。そして、命が終わるときに心の支えになるのは大切な人と一緒に過ごしてきた時間や気持ちを伝え合ってきたことなのではないでしょうか。一緒にご飯を食べたり、その日の出来事を話して笑ったり、「ありがとう。」「大好きだよ。」「いつも味方だからね。」そんな言葉が一番強く人を支えてくれるのではないのでしょうか。つまり、子の役割として親の死に目に会える会えないはそれほど大きな問題ではなく、普段から一緒にいられる時間やコミュニケーションを大事にすることで心を満たしておくことの方が大切なのではないかと考えました。いろいろな考え方があると思うので、これは一個人の意見として聞いていただければ幸いです。

余談ですが、この間、両親の結婚25周年を遅ればせながらお祝いしたときに姉、兄、私でお祝いとこれまでの感謝の気持ちを込めて手紙を書きました。私たちも両親もとても恥ずかしかったですが、普段あまり感情を表情に出さない父が満面の笑みになり母は笑顔で涙ぐんでいたのを見て、気持ちが伝わることの大切さを肌で感じました。

社会に出て、研修医として働きだしてまだ一年も経っていませんが、家族にも患者にも信頼される良い医師になれるようこれからも精進していきます。最後になりましたが、研修医の駄文を最後まで読んでいただきありがとうございます。